HCAP 東京大学運営委員会
東京カンファレンス 2013 報告書

HCAP 東京大学運営委員会 7 期

2013 年 4 月

http://hcap.hitomedia.jp/

本報告書について

本報告書では、ハーバード大学とアジア各国の大学の学生団体が運営する HCAP (Harvard College in Asia Program)の国際交流プログラムの 1 つであり、2013 年 3 月に HCAP 東京大学運営委員会 7 期が企画・運営を行った、東京カンファレンスについて報告する。

代表挨拶

2013 年 3 月 16 日から 24 日にかけ、約 9 か月間の準備の末に東京カンファレンスを開催致しました。ご協賛・ご協力してくださった皆様に厚く御礼を申し上げます。

私たちは、HCAP の活動は大学に入って広がった活動の幅を象徴している、と考えています。ビジネスメールや企画書の作成に始まり、組織の外で社会人の方々と関わりながら大きな予算を動かして企画を計画・実行し、組織として全く枠組みが存在しないところからひとつの企画を創りだすなど、HCAP の活動はこれまでに経験したことのないものでした。その幅の広さには時に戸惑うこともありましたが、ご協賛・ご協力くださった皆様方の多大なるご厚意に支えられ、本年度の東京カンファレンスは実現いたしました。改めて、頂いた機会と可能性に深く御礼申し上げます。

振り返って、東京カンファレンス実現までには様々な出来事がありました。これから一年間を共にする仲間と信頼関係を築くため、何度も集まり行った HCAP7 期の組織作りや、1 ヶ月間毎日のように顔を合わせ取り組んだ、8 月のハーバード大学へのアプリケーション作成。誰もが納得して東京カンファレンス作成に携われるような組織をめざした 10 月の組織再編。テーマへの理解を深めるため、広報と発表の準備に全精力を注いだ 11 月の講演会。実際に参加者と顔を合わせ、東京カンファレンスに加えるべき新たな側面を発見した 1 月のハーバードカンファレンス。そしてより良い東京カンファレンスのために何度も行った企画の再検討。

東京カンファレンスの準備を通して、私たちが悩み、理解し、得たものはたくさんあります。社会とのかかわり方、目標を立て意見をまとめることの難しさ、自己と他者の価値観の相違、組織に対する自身の貢献、仲間との刺激的な日々、そして何よりハーバード生との深い絆、生涯の仲間。これらを得るまでの過程は決して楽なものではありませんでしたが、結果として本年度の東京カンファレンスでは、ハーバード生にユニークな経験を与え、真剣なこともくだらないことも共に取り組み、その中でお互いの価値観を確かめながら絆を深めていくことができました。プログラムの一環として震災復興をテーマに東北を訪れた際には、実際に震災の現場に直面したハーバード生はみな真剣に復興への考えを語り、HCAP でなければ体験することができなかったであろう貴重な経験をしたと言ってくれました。

大学生活 1 年目からこのような実り多い機会を頂くことができたのは、HCAP 東京大学運営委員会の仲間たち、アラムナイの方々、ハーバード生、そしてご協力・ご協賛してくださった皆様のご厚意によるものです。ご協力頂いたすべての方々への感謝とともに、ここに HCAP 東京カンファレンス 2013 の報告をさせて頂きます。

HCAP 東京大学運営委員会　7 期代表　岡本和尊

目次

本報告書について 1

代表挨拶 1

目次 2

東京カンファレンス 2013 概要 3

始めに 4

1 日目 (3/16) 4

2 日目 (3/17) 5

3 日目 (3/18) 6

4 日目 (3/19) 7

5 日目 (3/20) 8

6 日目 (3/21) 9

7 日目 (3/22) 12

8 日目 (3/23) 13

9 日目 (3/24) 14

東京カンファレンス 2013　総括 15

東京カンファレンス 2013　参加者 16

東京カンファレンス 2013　会計報告 17

東京カンファレンス 2013 概要

主催　HCAP 東京大学運営委員会 7 期

日程　2013 年 3 月 16 日～3 月 24 日

参加者　東京大学生 12 名、ハーバード大学生 11 名

テーマ　Civil and Minority Rights

協賛　ベネッセコーポレーション
笹川平和財団
駒場友の会
HCAP 東京 alumni

後援　東京大学教養学部
外務省

協力

・担当教員
東京大学　准教授　松田恭幸様

・東北企画
女川町観光協会　事務局長　遠藤琢磨様
阿部真紀子様
女川魚市場買受人協同組合　副理事長　石森洋悦様
女川町復興連絡協議会 戦略室　小松洋介様
女川町きぼうのかね商店街の皆様
蒲鉾本舗 高政 取締役社長室長　兼　企画部長　高橋正樹様
女川本店　万石の里　店長　開発室　室長　菊池繁志様
つながっぺ支えあい隊　塩澤耕平様
福幸丸の皆様、　船長　佐藤友視様
山崎繭加様

・大泉町訪問企画
大泉町観光協会　副会長　小野修一様
齊藤恵利子様、鈴木マリアナ様
大泉町立西中学校サッカー部の皆様
ダイエーテック㈱　坂本和也様
日伯学園　高野祥子様
松本博史様　松本絹江様
Nanny Ana Ramayany 様
Gregory　Ludgero　Shibuta 様　Mike　Miranda 様
Paula　Harumi　Sugyo　da　Silva 様　Toyosato　Yuka 様

・難民ディスカッション企画
東京大学　特任准教授　山本哲史様
Forum for Refugees Japan (FRJ) Secretariat 石川美絵子様

・ユニバーサルデザイン企画
日本ユニバーサルデザイン研究機構　代表理事　横尾良笑様

・活動場所提供
ディーエイチシー
東京大学　理学部、工学部

始めに

HCAP におけるカンファレンスとは、HCAP の理念「米国のハーバード大学とアジア諸国の大学の学生が出会い、寝食をともにし、経験を共有し、Human Network（人と人との繋がり）を作りあげる」ための、一週間程度の交流プログラムである。

HCAP における交流は、ハーバード本部側が毎年設定するひとつのテーマに基づいて企画される。本年のテーマは Civil and Minority Rights（市民権とマイノリティーの権利）である。HCAP 東京大学運営委員会 7 期はテーマと関連する事項の中から、特に日本においてハーバード生とともに考える価値が大きいものを選び出し、プログラムを準備した。各々の企画は、ハーバード生に単なる旅行では得られない知見や体験を提供すること、文化交流を通じてハーバード生と絆を深めること、そして東大生とハーバード生が体験について話し合う中から、互いが普段は気付かないような新鮮な視点を得ることを目的として練り上げられた。以下に、東京カンファレンス 2013 の詳細について報告する。

1 日目 (3/16)

＜寿司パーティー・Opening Ceremony＞

東京カンファレンス 2013 は、3 月 16 日の夕方、東京大学の宿泊施設「和館」にハーバード生が到着し始まった。

まずは、手巻き寿司の夕食でハーバード生を迎えた。畳にふすまという「和館」の名に相応しい日本の伝統家屋で、手づから手巻き寿司を作る中で、ハーバード生に伝統的な日本の食事と雰囲気を楽しんでもらった。一緒に具材を選び簀巻きで手巻き寿司を作っていく中で、ハーバード生と東大生はお互いに少しずつ打ち解けていった。

夕食も終わりひと段落したところで Opening Ceremony を開き、日米両大学生が互いに自己紹介を行い、HCAP 東京の各担当者がプログラム紹介を行った。

Opening Ceremony の後は就寝まで自由時間とした。プロジェクターを天井に映してハーバード生と東大生が動画鑑賞を楽しむ場面や、男子が廊下でまくら投げをして盛り上がる場面など、早速自由な交流を楽しむ様子が見られた。

一通り交流を楽しんだ後は、長旅による疲れのためハーバード生は早くに就寝し、次の日から本格的に始まるプログラムに備えた。

2 日目 (3/17)

＜東京観光-Lost in Translation-＞

1. 企画内容

ハーバード生と東大生が両大学生を混ぜたいくつかのグループに分かれ、クイズを解きながら東京の各地を観光して回った。観光先は、以下の中からチームごとに選択した。

明治神宮/竹下通り/都庁/かっぱ橋道具街/浅草寺/皇居/秋葉原/東京大学本郷キャンパス

2. 企画目標

・ハーバード生に日本の伝統文化やサブカルチャー、東京の鉄道交通網の複雑さを体感してもらう

・協力作業や観光の中で東大生とハーバード生の交流の機会を作り、両大学生の親睦を深める

3. 企画実状

企画での経験を通じて、ハーバード生に日米の文化の差異や日本文化の様々な側面を感じてもらえた。たとえば、東京大学本郷キャンパスの合格者掲示板を前に日米の受験について盛り上がることや、複雑な地下鉄の地図を必死に見ながら次に行く場所を考えることで、ハーバード生は日米での様々な生活の差異を感じていたようだった。また、明治神宮での結婚式や、浅草の出店、昼食のお好み焼きなどからは、ハーバード生に日本の伝統文化の一端を見せることができた。

ゲーム形式の観光であったため、クイズの他にも観光客に声をかける、「HCAP」の人文字をつくって写真を撮るなどのユニークなアクティビティがあり、ただの観光とは一味違う、よりチームメンバー同士での関係が深まる企画となった。そのため、前日の夜にカンファレンスが始まったばかりだったにも関わらず、企画終了時には自然と会話が弾むようになっていた。

東京を一日中歩き回ったため帰ってきたときには皆疲れ切っていたが、自分の足で歩き、様々なものを目の当たりにしたことで、ハーバード生は知識ではなく肌で東京の街を感じることができただろう。

＜カラオケパーティー＞

日本発祥のサブカルチャーであるカラオケをハーバード生と東大生で楽しんだ。洋楽、邦楽共に皆楽しんでおり、日米で言語を越えた交流を行うことができた。最後には全員で声をそろえて歌う様子が見られ、一日を通して本音で議論する下地を形成できたように感じられた。

3 日目 (3/18)

＜東北企画一日目＞

1. 企画内容

津波の被害にあった宮城県女川町を訪れ、震災の経験を伺い、復興の現場を体感した。具体的な活動内容は以下のようになる。

バスからの街の見学、巨大冷蔵庫 MASKER の見学、仮設商店街「きぼうのかね商店街」の見学、観光協会の方によるガイド、女川町の方とのトークセッション、温泉入浴、トレーラーハウス ELFARO への宿泊

2. 企画目標

・「今」の日本を知り考える一つの切り口として、震災復興について考える

・津波の被害にあった女川町の現状を、実際に自分たちの目で見て、聞いて、感じる

・震災後 2 年間での復興の様子、被災地の今の課題などを知り、復興に必要なことや自分たちにできることを考える

3. 企画実状

当日朝 8 時頃、石巻市にて女川観光協会の方にお迎え頂き、石巻市が一望できる日和山の展望台や、震災時に火災で全焼した門脇小学校等を訪れた。津波の被害を目のあたりにし、実際に津波を経験した方からのお話を伺うことで、どこか遠くで起こったことだと感じていたことが、東大生はもちろん、ハーバード生の心にもより実感を伴って深く刺さった。

次に震災後に義援金で設立された巨大冷蔵庫 MASKER を訪れた。女川魚市場買受人協同組合副理事長の方にお話し頂き、津波による被害を避けるための建物に施された工夫や緊急時の避難場所としての機能について知った。また「幸せとは何だと思いますか？」という問いかけがあり、震災に限らず日頃の生活の中に、こうした大事なことを振り返る機会はあるのか、と思いを巡らせる契機となった。また、稼働時は－30℃となる冷蔵庫の中に入れて頂いたり、避難場所ともなる屋上へも登らせて頂いたりしたことで、体験の伴ったより印象に残る見学となった。

この日の午後は天候の関係でネイチャーガイドが中止となり、結果として仮設商店街で時間を有効に使えなかった点が反省点であった。しかし、商店街のお店をひとつひとつまわり、駄菓子や甘酒を買う、地元の子供たちと触れ合う、翌日のムービー作成のための動画や写真を撮るなど、それぞれが思い思いの時間を過ごすことができた。トークセッションでは、復興途中で新しい建築物を建てることが難しい街に、宿泊施設として移動可能なトレーラーハウスをつくるプロジェクトに関してお話を伺った。お話において講演者の方は、どのような思いでプロジェクトに取り組んでいるのか、またどのような困難があるのか、といったことについて熱心に語ってくださった。東大生もハーバード生も今後の継続性について疑問を投げかけたり、お話の後に講演者の方と話し込んだりする様子が見られ、講演の内容は両大学生の興味を大きく引いていた。

夕食後に行った温泉は、大浴場に皆で入ることが初めてのハーバード生にとっては異質な経験となったようだった。ここでは、日本の文化の一面を体験してもらうことができた。

1 日目だけでも女川町観光協会の方、巨大冷蔵庫 MASKER の方、トークセッションでお話いただいた方、きぼうのかね商店街の方など、多々の女川町の方にお会いすることができた。復興の鍵でもあり女川町の一番の良さでもある、人々の温かさや元気に触れることができた。

4 日目 (3/19)

＜東北企画二日目＞

1．企画内容

一日目と同様に宮城県女川町にて震災の経験を伺い、復興の現場を体感した。加えて女川町をテーマとした PR ムービー作成を行い、女川町への恩返しとしようとした。具体的な活動内容は以下の通り。

かまぼこ工場高政訪問（震災についての講話、工場見学、かまぼこ手焼き体験）、女川湾クルージング、ディスカッション、Onagawa Movie Competition、女川町の方とのパーティー

2．企画目標

・地元企業や漁業関連のお話をいただき、ディスカッションも交えることで、更に震災に関して知見を深める

・女川町の復興震災をテーマにしたショートムービーを作成し、東北企画で深めた知見を外部に発信する

・パーティーを通じて地元の方々と女川町の内と外の垣根を超えて対話する

3．企画実状

かまぼこ工場では震災に関する講和に加えて震災当時のビデオも見せていただき、視覚的にも強い印象をもった学生が多かった。震災についての講話、工場見学、かまぼこ手焼き体験など様々な体験が一つの場所ででき、ハーバード生も満足した様子だった。

クルージングでは女川湾を回りながら、震災当時の漁業の様子についてお話を聞くことができた。津波が来ているにもかかわらず、船を守るために漁師の方々が沖へ出ていったという話は、漁業を間接的にしか知らない私たちにとっては全く想像していなかったことであり、衝撃的であった。しかし船に乗っての女川湾めぐりは、それ自体が楽しい活動であったため、参加者の意識が時折お話から離れていたことが反省点である。

その後ハーバード生と東大生でディスカッションの時間を設けた。震災当時の自分の経験や印象、東北で過ごした二日間への感想などを共有し、東北におけるこれまでの経験を深化させた。

ムービー企画は、これまでの東北での経験のアウトプットという位置づけで 4 つの班で行った。「女川町のＣＭを作る」という内容で行い、ボストンや東京に帰ってからも発信を続けられるものとして、女川町へ少しでも恩返しになれば、という思いからの企画であった。それほど多くの時間を取ることはできなかったが、ハーバード生と東大生の密な協力で 4 本のムービーが完成した。この企画は今後の、周囲の人々への SNS を通じたムービー共有をもって本当の成功となるだろう。

パーティーでは、音楽イベントなどで女川町を盛り上げている「福幸丸」の方々と交流した。事前にハーバード生との間の言語の壁が懸念されていたが、福幸丸の方々が積極的コミュニケーションしてくださり、また東大生が間に入るなどして、全員の間で活発に会話が交わされていた。女川町の方々の多大なるご協力によって無事に二日目も終えることができた。

5 日目 (3/20)

＜大泉町訪問企画＞

1. 企画内容

日系ブラジル人が多く居住し、コミュニティを形成しながら労働している群馬県邑楽郡大泉町にて次のことを行う。

・町の現状・共生に向けた取り組みに関するレクチャー

・地元のサッカーチームの子供たちとバーベキュー・フットサルを通じた交流

・町に暮らすさまざまな立場の方からご経験やお考えを伺うグループセッション

2. 企画目標

・日系ブラジル人の方々を含む地域コミュニティにおいてどのように「共生」が行われているかを知り、在住外国人にとってもより暮らしやすい社会の実現の方策を考えるための一助とする

3. 企画実状

まず、町役場にて大泉町がブラジル人を受け入れた経緯や、日本人とブラジル人の共生のための自治体の取り組みに関するレクチャーをお聞きした。通常は 2 時間かけて話す内容を 30 分強にまとめてくださったので非常に中身の濃いレクチャーとなり、学生の側から多くの質問が出され、時間を延長しなくてはならない程だった。また、質問の内容はアメリカでの現状やシステムを念頭に置いたものも多く、日米の対比という視点がとりいれられており意義深かった。

その後地元のサッカーチームの子供たちとバーベキューやフットサルを通して交流した。言葉の壁を越えて、皆で芝生の上を走り回ることで、距離が縮まったように感じられた。

最後のグループセッションでは、5 人程度の小さな輪で、より具体的に日常生活のこと、教育のこと、雇用のことなどをテーマに「共生」について話を伺った 。日系ブラジル人の方々が大泉町にやってきた頃から町にいらっしゃった方は、初期に起こったさまざまな小さなすれ違いをあげつつ、それをどう乗り越えたかという話を通して、共生の難しさと方向性について語ってくだった。また、30 年以上にもわたって雇用側と労働側の調整をしてきた社労士の方は、外国から来た人でもそうではない市民が得ている情報を得られるようにするということの重要性を強調なさっていた。

少人数でのグループにしたことが功を奏し、逆に自らの相談をする学生もいる程に親密に会は進み、書籍や報道では聞けないような話もたくさん伺うことができた。一方で、話が弾みすぎてしまい、少々具体的なエピソードを聞き取るに終始した、という反省の余地があった。言語の問題に関しては、大泉町観光協会のかたのご厚意で地元の有志で通訳の方を募っていただいたほか、一部は東大生メンバーが通訳を行ったことで、問題なく意思疎通が取れていた。また通訳のほかにも、観光協会の方が全ての行程の調整をして下さり、大変大きな助けとなった。

6 日目 (3/21)

＜難民ディスカッション＞

1. 企画内容

日本の難民受け入れや在日外国人の問題について、山本哲史氏(東京大学特任准教授)、石川美絵子氏(Secretariat, Forum for Refugees Japan (FRJ))のお二方をお招きして日本の難民受け入れの実情について基調講演を賜った後、ハーバード生による質疑応答を行った。講演を基に、東大生とハーバード生が 3 グループ(2 グループ：教育、1 グループ：雇用)に分かれグループディスカッションを行い、議論の成果をハーバード生が発表した。

2. 企画目標

・日本に住む外国人と日本人がどのようにすれば友好的な関係を築き、お互いが住みやすいコミュニティを形成できるのか、前日の群馬県大泉町への訪問の実体験も踏まえながら考える。

・東大生、ハーバード生 1 人 1 人がディスカッションと発表を通じてこれまで学んだことのアウトプットを行う。

3. 企画実状

石川、山本両氏の御講演では、米国とは大きく異なる日本の難民受け入れ制度の実情を知ったハーバード生から次々と質問の手が上がった。ハーバード生は日本の制度に関して詳細な情報を求め、アメリカのケースを例に挙げながら日本の実情との対比を行うなどして、講義内容の理解を深めようとしていた。日本特有の問題でアプローチしにくい所も多々あったことだろうが、積極的に問題に取り組み、解決策を模索しようとする姿勢がハーバード生から明確に見て取れた。

その後のディスカッションでも、外国人の「住みにくさ」の大きな原因となっている言語の問題について、言語のサポートが充実しているアメリカのシステムを日本に取り入れることはできないかなど、ハーバード生がその場にいるからこそ出てくるようなユニークな様々な意見が飛び交った。意見の集約に苦労する場面も所々見られたものの、最終的にはハーバード生 1 人 1 人が独自の視点から日本の外国人の問題解決に対して自分自身の意見を表明するに至った。例えば、前述したハーバード生からのユニークな意見の一つは、幼くしてアメリカに移住した彼自身が受けたような充実した言語サポートの類を日本政府が取り入れ、日本に住む外国人に提供するといったものだった。もし実現出来れば言語の問題のハードルを大きく引き下げることが出来るという、アジア系のハーバード生ならではの大変興味深いものだった。このように単なる知識獲得に留まらず、その一歩先の発信型の企画にまで、企画の次元を高めることができたのは大きな収穫であった。

しかし同時に反省材料として、必要な知識を吸収し整理する時間が十分ではなかったことが挙げられる。今回の企画では、3 時間の中で、難民受け入れの実情についての説明からディスカッションまでを行った。結果として数人のハーバード生からは、ディスカッションの最中に日本の現状について再度説明を求める声が上がり、東大生から補足説明を行う場面が見られた。この問題の解決方法としては、発信型の企画の前にハーバード生がしっかりと知識をインプットするための時間を設けることがある。それによってディスカッションの質の向上が見込め、ハーバード生には日本の問題についてカンファレンス終了後もより思索を深めて貰えるはずである。

＜高校生との交流＞

1. 企画内容

東大生・ハーバード生・高校生の 3 者でスピーチ・プレゼン・ディスカッションを行う。

2. 企画目標

・ハーバード生と日本の高校生とが交流を深める

・宮城県女川町で経験したことを積極的に発信・共有することにより、高校生とハーバード生、東大生が互いに経験を深める

3. 企画実状

大学生と高校生が積極的にコミュニケーションを取り、会場は開始前から活気に満ちていた。東大生・ハーバード生が、それぞれの大学選びや現在学んでいる環境について話したスピーチは、大学受験を控えた高校生の興味を引いていた。高校生・大学生の緊張を解き会話が弾むよう、双方からの自己紹介と、在籍学校についてのミニプレゼンの機会を取った。このミニプレゼンはかなりの盛り上がりを見せたため、もう少し時間を多くとってもいい印象であった。

続いて 2 つのディスカッションの機会を設けた。まずは、東大生が東北訪問を紹介したビデオの上映と東北訪問の意図・内容に関するプレゼンを行い、これを踏まえて高校生と大学生が震災復興を議論した。参加した高校生は約半数が被災地訪問済み、残りの約半数が未訪問であり、前者はそれぞれの東北を訪れた経緯や感想を、後者は現在の東北に対する心境を話した。ハーバード生も東北を自分の目で見た当事者として議論に参加し、アメリカ国内で得られる震災にまつわる情報と、実際に現地を訪問した現在抱いている印象とを対比させながら、高校生の発言にコメントをしつ

つ議論を進めた。ハーバード生が「現地でより心に残ったのは被災地の傷跡よりも復興に向けた人の熱気だった」と語っていたことは、復興の力強さを物語るようで特に印象的であり、ハーバード生や同世代の学生が語る東北訪問の経験は高校生に大きな刺激を与えたようだった。このディスカッションの終わりには、被災地を訪問していない高校生の多くが東北に対して興味を持ち、何かをしたいと述べていた。20 分という時間制限の中で 9～10 人で議論をしたため、議論の深さという点では多少物足りなさが残ったようにも思う。しかし、震災や東北訪問の経験、またそれに対する立場の異なる参加者の考え方を共有できたこと自体にこの議論の意義があったと言えるだろう。

次に、付箋紙を使用したワークショップ形式の後半のディスカッションでは、参加者それぞれの震災復興に関する多様なアイデアを引き出す事ができた。工場の建設といった現地のニーズを見据えた大規模プロジェクトから、イノベーションを起こすために科学を勉強する、といった一見奇抜な、自分たちが日常的に実行可能な提案まで、実に多様なアイデアがそれぞれのグループで出された。最後に行った発表会では会場全体が堂々と発表する高校生の姿や寄せられた多彩なアイデアに興味津津であった。

最後の自由歓談では、高校生が興味を持った大学生に積極的に話を聞きに行き、会場全体が盛り上がっていた。話題はハーバード大学の教育システムや、東京大学のサークル紹介など多岐にわたっており、事後行われたアンケート調査にも自由歓談がより長く続けばとの声が多く寄せられたほどであった。その後参加者はフェイスブックで連絡先を交換するなどし、高校生・大学生間、また参加した高校生どうしの新たなつながりを構築できたようだった。

＜たこ焼きパーティー＞

1．企画内容
HCAP 東京大学運営委員会のアラムナイも交え、東大生、ハーバード生で和館にてたこ焼きパーティーを行った。

2．企画目標
・ハーバード生と東大生が、日本の特徴的な食べ物の一つであるたこ焼きを共に作り、一層の親睦を深める

・アラムナイとハーバード生の交流及び再会の場を作る

3．企画実状
高校生交流企画の後、大学内の宿舎「和館」に戻り、HCAP 東京の 5 期、6 期のメンバーも交えてたこ焼きパーティーを行った。

初めのうちは東大生が中心となってたこ焼きを作っていたが、その作業を見ているうちにハーバード生もたこ焼き作りに挑戦し始めた。作ったたこ焼きの形をお互いに評価し合い、関西と関東の違いについて話をするなどして、楽しく交流することができた。また、HCAP の本部ハーバード側では、何年か継続して活動を続けるメンバーが少なくないため、5 期、6 期のメンバーとハーバード生が再会を果たし、熱心に話し込んでいる光景も多く見られた。2 年ぶりの再開を果たして、卒業後は同業他社に就職することがわかったというドラマティックな展開もあり、カンファレンスの後も続くハーバード生と東大生の友情を見ることができた。

7 日目 (3/22)

＜着物体験・自由時間＞

22 日の午前は、ハーバード生の女子学生は着物を着る体験をした。着付け師の方々に 30 分ほどかけて着付けをしてもらい、着物を着て和室でお茶会を開いた。お茶会ではお茶を飲みながら和菓子を食べ，ハーバード生はアメリカでは滅多に和菓子を食べることができないと喜んでいた。これらを通じて、着物や和菓子、お茶、和室など日本の様々な伝統文化をハーバード生に楽しませることができた。

着付け体験を行った後は、観光のための自由時間を設けた。「自分と同世代の若者が普段休日にするようなことが体験したい」というハーバード生の要望から、ハーバード生と共に渋谷の街を散策した。渋谷のファッションセンター109 で買い物をした場面では、ハーバード生がボストンや自分の出身地での流行ファッションと、109 でのファッションの違いを説明してくれ、身近な日米文化の比較ができた。また、「可愛い」という言葉の概念について詳しく聞かれたり、ゴスロリ文化について質問されたりして、普段の生活では意識しないようなことを考え、言語化する機会を得て非常に有意義な時間を過ごした。

お昼には皆で和食のレストランに行った。各々が好きな料理を頼み、ハーバード生は日本で食べたかったものは全て食べられたと伝えてくれた。ハーバード生たちが「ありがとうございます」や「おねがいします」など覚えたての日本語を店員さんに対して使う姿が印象的だった。

＜自由時間・ホームステイ企画＞

ハーバード生の女子学生が着物体験をしている間、ハーバード生の男子学生は新宿や秋葉原などを散策した。アジア系のハーバード生が日本の紳士服店でスーツを買いたいといっていたので、付き添った。彼が言うには、確かにハーバードを中心としたアイビーリーグの大学におけるアジア系の占める割合は実に 2 割にもなるそうだが、アメリカ人口そのものに占めるアジア系というのはまだまだマイノリティなのだそうだ。そのためアジア系の骨格に合うスーツをアメリカで買うには特注品にならざるを得ず、値段も高くついてしまうが、日本ならば大量生産で安価に購入することができるそうだ。自分が社会集団におけるマジョリティであることによって享受している普段は気づかないような「当たり前」の利益があるということを再認識した。またこの晩、ハーバード生はそれぞれの東大生ホストにつれられてホームステイを行った。彼らにとっても日本の家庭の暖かさを感じる貴重な機会となっただろう。

8 日目 (3/23)

＜ユニバーサルデザイン企画＞

1. 企画内容

日本ユニバーサルデザイン研究機構理事長横尾良笑氏による、ユニバーサルデザインに関する半参加型のご講演。

2. 企画目標

・ユニバーサルデザインを通じて、マイノリティの視点について考える

・マイノリティの状況改善のための知識とノウハウに関する知見を得る

HCAP 東京メンバーは今年の HCAP のテーマであるマイノリティについて時間をかけて議論してきたが、その際当事者意識を持てていないのではないか、つまり実際にはすべての人が高齢者をはじめとするマイノリティとなる可能性を持っているにも関わらず、マイノリティに関する問題を自分とは関係のない出来事のように扱っているのではないか、というということを感じてきた。またそのことが問題解決に対する積極性が欠ける一因となっていると考え、マイノリティの視点を考えるべく、ユニバーサルデザインに着目した。

マイノリティは文字通り世の中において少数派である。そのようなマイノリティの状況改善のために多くのコストがかかるというジレンマがマイノリティの問題が解決されない原因の一つだと考え、このジレンマを知識とノウハウで解決しているユニバーサルデザイン研究機構（以下、UD 機構）を訪問し、お話を伺った。

3. 企画実状

UD 機構理事長のご講演は、3 つのセクションから構成されていた。

A. 日本における問題解決としてのユニバーサルデザイン

B. 新幹線におけるユニバーサルデザイン

C. 問題解決手法の人生設計への応用

A. 日本における問題解決としてのユニバーサルデザイン

日米のユニバーサルデザインを比較した際に、アメリカは資金投入によって状況改善を図るのに対し、日本は問題解決能力を上げるという方法によって改善を図っている。その問題解決における手法をレクチャーして頂いた。

B. 新幹線におけるユニバーサルデザイン

実際にユニバーサルデザインが施されている場面を観察するため、東海道新幹線の東京―品川間を、新幹線 N700 系電車に乗って往復した。車内では、実際に車いす対応のトイレや、気分の悪くなった乗客が休憩するための個室など、普段乗っていても気付かないような様々な工夫を見ることができた。

C. 問題解決手法の人生設計への応用

ユニバーサルデザインで用いられている問題解決の手法を、人生における目標の明確化に応用した。「将来したいと思っていること」をいくつか書き出し、それを基に理事長と 1 対 1 で話していくという方法で進められた。その他の人も普段聞くことのなかった将来設計の話で盛り上がり、人生の指針について他人と真剣に考える、日常にはない刺激的な時間を過ごした。

＜東大生×ハーバード生　交流パーティー＞

1. 企画内容
東大生全体に対して開かれたパーティーを企画した。

2. 企画目標
・ハーバード生と交流する機会を、HCAP 東京のメンバーのみならず、より多くの東大生と共有する

3. 企画実状
夕方から駒場キャンパス内のレストラン「イタリアントマト」で開始した交流パーティーは、ハーバード生の自己紹介から始まり、お互いの大学生活のことから学問のことまで、幅広い話題で盛り上がった。東大生とハーバード生は、初対面にも関わらずすぐに打ち解け合い、2 時間のビュッフェスタイルの交流会はあっという間に終了した。パーティー終了時に実施したアンケートでも、企画全体への満足度に関する質問で、参加者の 4 分の 3 は 5 段階評価で最も高い「とても満足した」を選択しており、多くの東大生に満足度の高い機会を共有することに成功した。

9 日目 (3/24)

＜最終日＞

最終日である 24 日も、HCAP が第一義に据えている「Human Network の構築」という理念に基づいた活動を行うことができた。

企画外ではあったが、六本木アートナイトと、カンファレンスの日程が重なっていた関係もあって、一部のハーバード生と共に森美術館や周辺のアート施設に赴き、現代アートの発信都市としての東京という新たな側面を見ながら共にさまざまな社会問題や、主張手段としてのアートについて語ることができた。最後に六本木ヒルズの展望台から再び、初日の都庁展望台と同様に東京を一望したとき、ハーバード生の東京を眺める目は初日のような羨望や驚きではなく、懐かしみのこもったものになっていた。展覧会の中で東北や第二次世界大戦に関した作品が展示されていたせいか、後日ハーバード生の帰国後も様々な話題の種となっていたので、実りあるものだったと感じている。午後にはハーバード生を成田空港まで送り、無事帰国の途に着いたのを見守り、本年の東京カンファレンス は幕を閉じた。

東京カンファレンス 2013 総括

東京カンファレンスは、HCAP プログラムの本部であるハーバード大学が設定したテーマ「Civil and Minority Rights」を中核に、「東大生の見せたい日本」と「ハーバード生が見たい日本」を組み合わせた、私たちの大学一年間を捧げた「作品」です。

中心となるテーマは、ハーバード生と知見を深める HCAP プログラムの最大の魅力です。本年度は日系ブラジル人や難民の方をはじめとする在日外国人との共生の在り方や、マイノリティへの支援が抱えるジレンマなど、正面から問題意識を設定し、その解決への一歩となる思考を重ねられるプログラムを作成し、テーマに真摯に向き合うことができたと自負しております。

また本年度はハーバード生を宮城県女川町に連れて行きました。私たちが今、彼らに見て欲しいと感じた日本は、震災から力強く復興する東北でした。高校生とのディスカッションを経て、震災や復興について一層強烈な印象をハーバード生に残すことができたのではないでしょうか。

そして HCAP 東京の設立理念である「Human Network(人と人との繋がり)」の達成のためにも、ハーバード生が期待するような文化交流を中心とした企画も組み込みました。「Human Network(人と人との繋がり)」のプラットフォームとなっている SNS サイトでは、ハーバード生たちが着物の写真を自分のプロフィール写真にするなど、彼らの高い満足を得られたと思っております。

しかし、多くの目標が達成された一方で、新たに発見した課題もありました。企画を作成するにあたってユニークに日本を切り取り、提示しようとするあまり、異文化理解のような知的好奇心を刺激する内容が減り、ハーバード生の満足度を担保できるかが非常に不明瞭になったことです。また、テーマと直接の関係性を持たない東北訪問を企画に加えたことで、カンファレンスの統一感が多少失われてしまったことも課題として挙げられます。ハーバード生の期待する文化交流とも、カンファレンスのテーマとも異なる東北訪問企画があることは、彼らにカンファレンスの内容がまとまりを欠いたものである印象を与えてしまったのかもしれません。これらの課題を受けて、ユニークな視点を取り入れながらも、カンファレンス全体として統一された、刺激的な経験をハーバード生に与えられるような企画群を今後のカンファレンスには期待します。

HCAP では、カンファレンスを一般的な旅行と差別化することに細心の注意を払っています。本年度もユニークな日本を切りとり、それをプログラムとしてハーバード生に提供することに挑戦しました。彼らからは、HCAP のカンファレンスだったからこそ見ることができる日本を経験できた、という感想を頂いており、この試みは概ね成功だったと言えます。「Civil and Minority Rights」がグローバルな課題であるならば、震災復興は今なお日本の抱える大きな課題です。そして東京カンファレンスを経験したハーバード生により Human Network を通じて、日本の震災復興の力強い姿はアメリカへ、そして世界へと広がって行きます。これこそが私たちの目指している HCAP の姿です。

末筆となりましたが、東京カンファレンスにご協力頂いた全ての方々に厚く感謝申し上げ、本総括の締めくくりとさせて頂きます。

今後もより一層意義深いカンファレンスを後輩たちが創ってくれることを祈って、

HCAP 東京大学運営委員会 7 期　副代表　浅井 友輔

主務　名取　徹

2013 年 4 月

東京カンファレンス 2013　参加者

■ハーバード大学より

Name	Gender	Major (Major/Minor)
Amanda McGowan	F	History
Anissa Mak	F	Economics / Psychology
Divya Kishore	F	History of Science / Medicine and Society
Emily Wong	F	History and Science
Emily Zhang	F	Economics
Heidi Lim	F	Environmental Engineering
Jason Zhang	M	Economics / East Asian Studies
Linda Ling	F	Economics
Maddie Halimi	F	Social Studies
Schuyler Berland	M	Visual Anthropology
Sean Cha	M	Applied Mathematics/Economics

■東京大学より

名前	性別	所属科類
浅井 友輔	男	教養学部前期課程文科一類
岡田 桜	女	教養学部前期課程理科二類
岡本 和尊	男	教養学部前期課程文科二類
吉川 慶彦	男	教養学部前期課程文科一類
西條 柚	女	教養学部前期課程文科一類
宋 柄樹	男	教養学部前期課程理科一類
高橋 愛	女	教養学部前期課程文科一類
田原 早耶香	女	教養学部前期課程理科二類
中村 裕一	男	教養学部前期課程理科一類
名取 徹	男	教養学部前期課程文科一類
野村 俊一郎	男	教養学部前期課程理科一類
室 憲之介	男	教養学部前期課程文科一類
守崎 美佳	女	教養学部前期課程文科三類

東京カンファレンス 2013　会計報告

〈収　入〉

項　　目 (敬称略)		金　　額
寄付金	株式会社　ベネッセコーポレーション	1,500,000
寄付金	駒場友の会	300,000
交通費	公益財団法人　笹川平和財団	250,000
寄付金	HCAP alumni	100,000
前年度繰越金		217,245
計		**2,367,245**

〈支　出〉

項　　目	金　　額
宿泊費	446,590
施設費	352,445
食費	468,281
物品費	127,401
交通費	626,340
雑費	65,495
計	**2,086,552**

〈収支差額〉

項　　目	金　　額
計	**280,693**